

新右翼にとつての
「カッコいい死に方」とは何か？

鈴木邦男

自決に見る死の美学 全速力で駆け抜けた 野村秋介の生き様と死に様

野村秋介さんが自決してからもう23年が経つ。朝日新聞本社で社長と面会している席で自決した。1993年（平成5年）10月20日だ。この日のことは今でもはっきりと覚えている。

この日は全日空ホテルで全国から大勢の右翼・民族派の活動家が結集し、「新しい時代に対する民族派の使命」と題するシンポジウムが開かれていた。野村さんもパネラーの一人として出席することになっていた。僕も一水会の仲間たちとその場にいた。司会者がまず挨拶した。「これから開会します。野村さんは今、朝日新聞に寄っていますが、すぐに駆けつける予定です」と言い、シンポジウムは始まった。

野村さんと朝日新聞の闘いは1年も続いていた。でも朝日側は全面的に非を認め謝罪した。この日はその確認のために野村さんと朝日の社長が会う。すぐに終わるだろう。すぐに駆けつけて、野村さんもシンポジウムに加わるはずだ。そして対朝日の闘いに勝った報告をしてもらえるはずだ。

ところが20分ほどして、会場がいやに騒がしくなり、異変が起こった。パネラーや司会者にメモが回り、あたふたと外に出る人、外から入ってくる人がいて、ヒソヒソと囁きあっている。「一体どうしたんだ」と

僕らも思った。その時、司会者は真っ青な顔をして、マイクの前に立ち、「今、悲しい知らせが入りました。野村秋介さんが亡くなりました」と言う。いっせいに「本当か」「どうしたんだ」と声上がり、騒然とし、大混乱になった。

もうシンポジウムなどやっているどころではない。中止になった。そして、シンポジウムの主催者たちを中心に、これからどうするかが話し合われた。「いや、それより病院だ」「行っても無駄だ」「じゃあ、朝日新聞に行こう」とバラバラに外に飛び出す。

その前に、野村さんと朝日の闘いについて少し説明しておこう。野村さんは別に朝日は嫌いではなかった。右翼の中には、「朝日は左翼だから嫌いだ」、「不買運動をやろう」と言う人が多い。でも野村さんはそんな偏狭なところはない。朝日の記者に友人が多かった。

「朝日、毎日、東京」は左翼だから敵だ、と考えている右翼の人が多かったし、その反対の「産経、読売」は我々の味方だと思っている。しかし、右翼について（批判も含めて）載せるのは、朝日、毎日だけだ。産経、読売は全く載せない。なぜか。多分、こういう理屈だ。産経、読売は「右だ」「右翼だ」と言われることが多い。でも「我が社は中道をいつている。右翼ではない」と思っている。だからこそ、右翼の主張などは載せない。「一緒ではない」と言うためだ。

その点、朝日新聞は初めから立場が違うと思われる。「一つの主張」として右翼のことも載せている。また、「敵であるはずの右翼の主張を載せるなんて度量が広い。寛容だ」と思われる。野村さんは、朝日新聞、朝日ジャーナル、そしてテレビ朝日の「朝まで生テレビ!」にはよく出ていた。しかし、産経、読売はない。野村さんは言っていた。「朝日、毎日の主張は左だ。しかし右翼の発言や行動は載せる。一方、産経、読売の主張は右的だ。でも右翼の発言は絶対に載せない。どっちがいいのか」と。

だから朝日の記者とはよく会っていたし、心を許していた記者も多い。そんな朝日だったが、「これだけ

